

1934（昭和9）年、中山正善天理教二代真柱の意向によって造成された親里大路のイチョウ並木（前号図1）は、80年以上経った今日でも、私たちに安らぎと癒しを与えてくれる。前号で紹介したように、さまざまな経緯はあったものの、イチョウ並木が再生されつつある今の状況を見ると、強剪定の経緯を忘れさせてくれる。しかし、なぜ強剪定がおこなわれるようになったのか、私たちはその経緯を考え、私たちへの課題として受けとめる必要がある。

そもそも親里大路のイチョウが剪定されるようになったのは、沿道沿いの住民やこの通りを車で行き来する人たちが、奈良県の担当部局へたびたび連絡を入れたことに始まる。それは、「落葉が住宅や店の前にたくさん落ちて困る」、「落葉が車道一面に敷き詰められるとスリップして事故が起きやすくなる」、あるいは「枝葉で道路標識や信号が見えづらい」といった相談や苦情が寄せられたからである。これは、「安らぎと癒しを与えてくれる」という感謝・感動よりも、「枝を切ってほしい」という苦情の方が、担当部局に届きやすいからかもしれない。とはいえ、苦情への対応は大切なことである。

1. 防火特性に優れたイチョウ

2012年の国土技術政策総合研究所の調査によると、日本で街路樹として植栽されている樹種の第1位はイチョウ（8.4%）で、サクラ（7.7%）、ケヤキ（7.2%）、ハナミズキ（5.3%）、トウカエデ（4.8%）がその後に続いたという。これら5種の樹木のうち、ハナミズキを除く4種は天理市街地に街路樹として広く植栽されている（前号図2）。これら5種に共通するのはいずれも落葉樹で、毎年葉は枯れ、車道や歩道に舞い落ちるということである。

なぜ、落葉樹は街路樹として植栽されるのか、あるいは好まれるのか。それは、毎年四季によって装いが変わる木々の変化を楽しむことができるからかもしれない。新緑の青葉若葉の春、深い緑葉が繁る夏、舞い散る黄葉や紅葉の秋、枯れ木を装う冬。毎年変わることのない落葉樹のリズムに、人生を投影させているのかもしれない。童話の『葉っぱのフレディ—いのちの旅—』（1998年、童話屋刊）に共感する日本人が多いのも、同じような理由からであろう。

いずれにおいても、これら5種の樹木が街路樹として植栽されているのは、車の排ガス汚染に対する耐性が比較的高いことや、イチョウの場合はとくに延焼を防ぐ効果があるとされる防火性の高さからではないかと考える。

関東大震災や東京大空襲のとき、イチョウの木々が家屋の延焼をくい止めたように、イチョウ樹皮のコルク質の部分は比較的厚く、耐火性に優れているのである。たとえば、東京・浅草寺には、1945年3月10日の東京大空襲のさい、焼夷弾の直撃を受けて上部が吹っ飛んだという、当時天然記念物に指定されていた樹齢およそ800年とされるイチョウの大木がある。このイチョウの幹の内部は焼けて空洞になっているが、それでも焼けた上部の脇から萌芽更新し、青葉繁れる夏になると、焼けた上部はほとんど見えないほど再生されている（図1）。イチョウの木々が街路樹としてだけではなく、防火・防災対策として



図1. 東京大空襲の火災に耐えた浅草寺のイチョウの古木。「浅草 smart ニュース」(<http://asakusanews.com/>)より転載。

有効に機能することも、イチョウの特徴である。

このように、イチョウの木は車の排ガス汚染に強く、防火・防災に優れている点が特徴だが、そのうちの防火特性は、加藤清正が熊本城を造築したさいにも活かされている。それは、別名“銀杏（ぎんなん）城”と呼ばれる熊本城には、防火対策として、イチョウがたくさん植栽されていることから窺い知る

ことができる。このように、イチョウの防火特性は戦国時代以前から知られていたようである。

ただ、現在もこれほど多くの場所でイチョウが街路樹として利用されているにもかかわらず、落葉や種実である銀杏があまり有効利用されていないのも珍しい。とくに、イチョウの葉は水分含量が多く、堆肥としてはほとんど利用されていない。街路に落ちたほとんどのイチョウの葉は、個人や事業者・清掃局などによってごみ扱いされ、収集・焼却されているのが現状である。

2. イチョウ葉の堆肥化実験

東京大学の学生サークルに「環境三四郎」がある。駒場キャンパス内で地域住民や他大学の学生と一緒にエコ活動をおこなう組織で、「落葉堆肥化」「環境の世紀」「駒場祭エコ」「みず」「目黒区」の5つのプロジェクトを実践する環境実動サークルである。このサークルは、1992年、リオで開催された「地球サミット」を契機に誕生した。

「落ち葉堆肥化」プロジェクトでは、落葉を生ごみ・米ぬかと混ぜて堆肥化し、キャンパス内の野菜畑で堆肥としての効果を確認する実験を続けている。理論を学ぶだけでなく、実践による効果を確認する活動である。それは、「環境三四郎」創設時のメンバーが示した、「学習と行動」「批判ではなく提案」「交流そして成長」という理念に基づく活動である。知識と理屈に偏りがちな学生にとっては、実践と効果で確認する視点は重要である。もちろんそれは学生だけでなく、われわれ大人においても同じことである。キャンパス内で集められた落葉が焼却されることに悩んだ学生たちのこの「落葉堆肥化」プロジェクトは、イチョウ葉の堆肥化にも活かされ、およそ1年かけて作り上げた堆肥「100%東大の落葉」は、東大駒場祭で無料配布されている。

一方、「NPO法人環境市民ネットワーク天理」も、循環資源利用健康推進事業合同会社、天理高校、天理大学おやさと研究所との協働で、イチョウ葉の堆肥化実験を実施し、良好な第1次発酵「堆肥」を作製することに成功した。その成果は、『天